
最後の幻

虚空俊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の幻

【Nコード】
N1454B

【作者名】
虚空俊哉

【あらすじ】
ある高校生の最後の一日。もしかしたら、こんな事が現実におこりうるかも、と思い書きました。

（前書き）

初めての短編です。

^
-
^
;

多分かなり読みにくいと思います（

高校三年の冬、世界は喧騒と憎悪に溢れていた。
いつ戦争が始まってしまったら、不思議ではない。
そんな世界に生きた、一人の高校生がいた。

俺は今、現役バリバリの受験生です。
目指す大学は、一応国公立を狙っているんだけど…。
勉強なんて真面目にやったことのない俺は、すぐにやる気を失った。

今は滑り止めに受けた私立の大学でいいかな、と思っている。
そんな俺でも表向きは勉強しようと、冬のこの寒い時期に、わざわざ地元の図書館に向かっている。

俺に反応したドアが、早く入れよ、と言わんばかりに、さっと開いた。

かじかむ手を摩りながら、自動ドアを通る。
俺は自然と早足になる。早く寒い外から逃げたいのもあるが、もう一つ理由があった。

図書館に入って、静かな館内を、なんとなくに見渡す。そして、俺の視線はある一点で止まった。

そこには、いつも一緒に勉強している、俺の友達が座っていた。
どうやら向こうは俺に気付いてないらしく、机に広げた勉強道具の上で携帯をいじっていた。

俺は、ゆっくりその友達に近づく。
『後ろから脅かしてやろう。』

俺の中のいたずら精神に火が着く。ゆっくり…ゆっくり、

「あれ？としゃちゃん!!」

ちいっ！気付かれた！

「よ、よう！大将ちゃん」

いかにも今気付いたかの様に言ってしまう俺…

「今日も勉強かよ？がんばるねえ。」

俺と大将は、成績も一緒くらいだし、よく気が会う。なにかと一緒にいる時間が長い奴だ。

「いやゝとしゃが来ると思って来たんだけど、なかなか来なくてさ。もう勉強も飽きたところだったんだよ」

大将は、笑いながら小声で呟く。図書館なのであまり話しはしてはいけない。

俺は大将の近くに席をとり、勉強道具を広げた。

何時間たっただろうか。俺と大将は、小さな声で談笑しながら、勉強していた。

もう外は暗くなりかけている。向こうの空は、夕日で赤く染まり、綺麗なグラデーションを彩っていた。

「そろそろ帰るか、」

大將は机に広げたノートやらを、手際よく手提げカバンに入れながら言った。

「そうだな、外、寒くなりそうだし。」

冬の夜は特に冷え込む事は、身をもってしっていた。だからもつと暗くなる前に帰ろうと思ったのだ。

図書館を出て二人並んで歩きだす。

ふーっ、とため息をつく白い息が碎けて、空に昇っていく。

ふと、赤い夕焼けが目映った。

「きれいだな…」

どちらともなく、感嘆が漏れる。

「地球はこんなに綺麗なのに、なんで人は戦争なんか起こすんだろっな」

なぜか感情的になって、俺は言っていた。

「まあ戦争なんて、日本では起こるはずもないけどな」

ははは、と大將は笑った。 実際俺もそうだと思っていた。こ

の平和な日本に戦争なんて… 今の今までそう思っていた。

空に光る赤い塊をみるまでは、

「お、おい…あれ、なんだ？」

俺は遠くの空に移る赤い光が、こっちに向かって軌跡を描きながら飛んで来ていた。

「…隕石??」

間の抜けた声で、大將が問う。その問いに誰もが答えるわけもなく、空に消えていく。

その間にも赤い塊は、確実にこっちに近づいているように見えた。なにかがおかしい。隕石な訳がない。あんな大きいのが地球に近づいているならニュースにでもやっていたはずだ！ なんなんだ、

あれは！！

しかし、その答えを捜す事もなく、近づくにつれて自然に正解が導きだされた。

「お、おい！あれ、ミサイルじゃないのかっ！？」

大將がさつきとは違って緊迫した声で問いかける。

や、やばい。でもなんでミサイルが！？日本に？

そんな事を考えている暇はなかった。

「お、おいっ！逃げるぞ！！」

い、いや、逃げるってどこえ？

「とにかく遠くだっ」

そういつて、ミサイルらしき物が見えている方向と逆の方向に走りだす。

そんな事は、無駄だと分かっているのに、人間、極地に立たされると思惑回路が混乱してしまうのだと、この時改めて実感してしまった。

俺達とはにかく走った。しかし、それも少しの間だった。

一緒に、物凄い光の後、地響きが俺達を襲う。

「う、うわあああああ！！」

叫ぶ事しかできない、俺達に先程より大きな揺れが襲う。

ガガガガッ！！

そして、俺達は気を失った。

真つ暗な世界の中俺の意識はさ迷っていた。俺は…死んだのか？と、ありきたりな考えを浮かべてしまう。

なぜか、意識がゆらいでいる。

(とし…！と…！としゃっ！)

「としやっ…！」

俺の意識が覚醒した。闇から意識を掬い上げる。

「…ん？あれ…！！そういえば、町は…！」

俺は慌てて立ち上がる。しかし、そこには、なんら変わらないいつもの日常が広がっていた。

静けさを保った、日本という国。ミサイルなんかに破壊された跡など、どこにもなかった。

「あれ？なんで…」

俺はほうけたように大将に問う。

「さあ…俺もさっき気がついたんだけど、なんともなかったんだ、」

「

大将も首を傾げながら考えている。

なんだったのか… あれはたしかにミサイル、爆弾だったはずだ。

地響きに、閃光、そして気を失う前にみた燃え盛る炎。

あれはなんだったのか。

釈然としない気持ちに苛立ちながらも、答えがでないので、俺達は、仕方なく家に帰ることにした。

口数少なく、分かれ道で大将と別れ、俺は、家についた。

「ただいま」

帰途をしらせる挨拶もどことなく元気がでない。玄関で靴を脱いでいると、キッチンから母がでてきた。

「あら、おかえり。今ちよっと、としの名前がニュースで流れてびつくりしてたところなのよ。」

母は、心配した声色で俺に言った。俺の名前？同姓同名のやつがいるのかな

取りあえず急いでテレビのある居間へ行った。

テレビからは、歳をとったベテラン風をふかせているのアナウンサーが、原稿に書かれたニュースを読み上げていた。

「こんばんわ。今夜のニュースです。午後8時頃、北朝鮮が日本に対して武力行使を行い、ミサイル2発を発射しました。内1発は、海に落ちましたが、もう1発は、市外に命中し、死傷者が出た模様です。」

そこまで言うと、画面は現場の風景へと変わり、下にテロップで死傷者の名前が写しだされた。

「……………としやさん（18）……………大将さん（

18）」

！？なぜっ？俺は困惑していた。名前も歳も一緒？しかも大将の名前まであるじゃないか。なぜだ？

「なお、北朝鮮の攻撃が続くと予想され……」

テレビからは、電子的な声が延々と流れている。

混乱していた、俺は、ふと母を捜す。しかし母はどこにもいない。それどころか、家すらなくなっていた。辺り一面、焼けてなに一つ残っていない。

「…えっ？」

それしか言えなかった。呆然としたまま、俺は立ち上がる。しかし、なぜか足がない。というより、透けている。段々と、体が透明になっていく。

この時初めて俺は実感した。俺は、死んだんだ、と。今まで見てたのは幻だということを、

『死者のご冥福をお祈りします』

どこからか、そんな声が聞こえた気がした。

～完～

（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございます！！ 下手な作者ですが、よかったら感想、ご指摘など、書きこんでくれるとうれしいです。（^ー^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1454b/>

最後の幻

2011年2月1日04時03分発行